

華国鋒伝

新井宝雄著

華国鋒伝

新井宝雄 著

青年出版社

著 者 紹 介

あら い たけ お
新 井 宝 雄

1919年、埼玉県に生まる。1941年、東亜同文書院卒業。
毎日新聞社に入社。香港、ソウル、北京特派員、論説委
員を歴任。

主要著訳書——『中国の素顔』『中国の現実』毎日新聞
社、J. ミュルダール、G. ケスレ著『麵と豚と革命—連
続革命下の中国—』河出書房新社、『毛沢東の時代』『毛
沢東と劉少奇』潮出版社、『批林批孔の内側—中国人は何
をしているか—』『中国と第三世界—現代史を動かす力—』
大和出版、『世界を動かす中国』小峰書店、『江青とその
一味—「四人組」顛末記—』青年出版社。

華国鋒伝

定価2800円

1978年5月31日 第1刷発行

著 者 新 井 宝 雄

発 行 者 福 井 肇

発 行 所 東京都千代田区 株式会社 青年出版社
神田錦町1～4
電話 (291) 1189 振替 東京 6-49658

0023-060365-3835

まえがき

名宰相とうたわれた周恩来が、一九七六年の一月に逝去したあと、華国鋒が國務院総理代行になり、ついで四月の天安門事件ののち、中国共産党第一副主席兼総理という要職についたということをきいたとき、世界の人たちは、お

しなべて一種のとまどいを感じた。そのほかの中国の要人たちについては、予備知識をそれなりに持っていたのだが、華国鋒については、湖南省で活躍していたということや、中国共産党第九回全国代表大会で中央委員に昇進し、林彪事件後中央で仕事をすることになってから、一九七五年一月の第四期全国人民代表大会で、副総理兼公安部長になったということぐらいのことしか、わかっていなかったからである。中国共産党の歴史のなかにもかつてなかった、党の第一副主席という職位につき、事実上、毛沢東の後継者になった人物であるから、その思想、人柄、経歴および業績などあらゆる点からみて、中国の次代をにない指導していける、すばらしい政治家であるにちがいないのだが、そ

の詳細がまったくいってもよいほど、わからなかったものである。

しかし、これはただ外国人にとってそうであったばかりでなく、中国の人たちにとっても、いくぶん、そのような傾向はあったようである。なぜなら、毛沢東自身、華国鋒に「あなたがやれば、わたしは安心だ」という文字を書いてわたすまえに、「この世論をそだてて、華国鋒同志を宣伝し、全国人民が、華国鋒同志をしだいに理解するようにしなければならぬ」と指示していたからである。このことは、毛沢東自身は華国鋒の業績やその人柄を熟知しており、したがって、自分の後継者とするのにふさわしい人物である、という確信を抱いていたのであるが、全国的にはまだかならずしもそういう状態にまでは、いたっていなかったということを示している。

このような情勢のなかで、中国では実際に、党内の第一回目の大きな路線闘争と位置づけられた「四人組」との

闘争が、すすんでいたのであるが、毛沢東の死後、党と国家の権力を奪取しようとして、クーデターまで計画した「四人組」を、華国鋒を中心とする党中央政治局が、果断な措置をとって、一举に「隔離審査」の対象にしてしまったあと、一九七六年十月二十四日、天安門前の広場で「四人組」を追放し、華国鋒が党中央委員会の主席と党中央軍事委員会の主席に就任したことを祝う、一〇〇万人の大集会が開かれた。このとき、わたしは北京に滞在していた。そしてさいわいにも招かれて、このさかんな式典に親しく参列することができた。さんと降りそぐ秋の陽をあびながら、華国鋒が、ひときわ美しく照り映えている天安門の楼上に、その姿をあらわしたとき、わたしは、中国の歴史が、ここに新しい段階にはいったということを、しみじみ感じたのであった。この大集会は事実、波瀾に富んだ毛沢東の時代が終り、華国鋒を指導者とする新しい時代が、実際に、その幕をあけたということを、公式に示したものであったからである。

その瞬間に、わたしは、まずこの「英明な指導者」とうたわれた華国鋒という人物に焦点をあて、その経歴、思想および業績などを、つぶさに調べていきたいと思った。それがわかれば、毛沢東が、なぜ華国鋒を自信をもってその後継者に選んだのかという理由もわかるし、これからの中国

が果たして、どのような方向をたどるのかという世界の関心にも、じゅうぶんにこたえてゆくことができる、と考えられたからである。もっとつきつめたいいかたをすれば、華国鋒を知ることとは中国を知ることである、という考えかたが、わたしの脳裡をかすめたのである。

それ以来わたしは、華国鋒に関する資料を、できるかぎり集めることに努力を傾けた。資料に乏しく、最初は困難だったが、そのうち、華国鋒の業績やその人柄を伝える、『華主席在湖南』（人民出版社）などいくつかの出版物も手にはいるようになった。それらに『人民日報』や中国新聞社のニュースなど、正確な資料を加えて整理したのが本書である。これらの材料は、かつて華国鋒とともに長いあいだいっしょに生活し、華国鋒とじかに接触したことのあつた人たちの、証言をもとにしたものばかりだったので、たいへん参考になった。また、多くの人たちの想い出話のなかには断片的ではあるが、ひじょうに重要なことがらが多くまれていて、前後の筋道をつけていくのに、たいへん役にたった。

このようにして華国鋒を描いてみると、華国鋒が、反帝・反封建の新民主主義革命をたたかっていたときから、社会主義革命を遂行するようになった新中国の革命と建設の時期をとおして、一貫して、きわめて毛沢東思想に忠実であつ

たということがよくわかる。そして華国鋒は、湖南省の時代には彭德懷、劉少奇および林彪との激しい路線闘争をたたかいぬいている。したがってこのたたかひのなかで、毛沢東との関係もまた、しだいに深くなっていったのである。

華国鋒が、一九五五年十月の七期六中全会で、湘潭地区の農業集団化についての報告をおこない、その業績が党中央によって高く評価されて以来、大きな路線闘争が展開されるたびに、毛沢東は、かならず華国鋒をばってきし、重用していった。彭德懷との闘争のあと毛沢東は、みずから華国鋒を湖南省の書記とするように提案しているし、その劉少奇とのたたかひのなかでも華国鋒は、湖南省の第一書記と党の中央委員になっている。さらに、林彪との対決をへたあと華国鋒は、國務院副總理の要職についている。

事態をこのようにとらえてみると、周恩来や朱徳らの戦友が逝き、「四人組」との矛盾がしだいにたかまってくるなかで、毛沢東が、こんど、中国を安心してまかせられる人物として、華国鋒に白羽の矢をたてたというのは、まことに当然な措置だったのである。

また華国鋒は実際に、日本軍および蔣介石の国民党軍と戦い、反帝、反封建および反官僚資本の新民主主義革命に従事したばかりでなく、県、地区、省および中央の仕事を担当し、そのあいだに文教、農業、水利、工業、財政、貿

易、軍事および科学・技術などあらゆる方面の社会主義革命と建設の経験を積んでいる。そして、つねに大衆のなかにおり、大衆とともに呼吸し、前進している。自分の地位があがったからといって、少しもたかぶるところがなく、つねに謙虚に学習し、ひじょうに質素な生活を送っている。

いっぽう、華国鋒は、ことに臨んでは原則を重視し、大衆の利益をはかるということを基本にして、適切な政策を大胆に展開してゆく力量をもっている。このことは「四人組」を追放したあと、華国鋒が、ただちに「農業は大案に学ぶ全国会議」と「工業は大慶に学ぶ全国会議」を召集して、経済建設の革命的な基盤をがっちりうち固めるとともに、党の一一全大会について政治協商會議第五期全国委員会と第五期全国人民代表大會を開いて、国家体制をいちはやく整えていった優れた手腕などをみても、よくわかることである。こうして、華国鋒は、毛沢東がみずからその後継者として選んだ人物に恥じない、党、軍、各民族人民の優れた指導者であるということが、わかるのである。

また華国鋒が、毛沢東の「三つの世界論」の立場を堅持することによって、世界の動向に直接、きわめて大きな影響をあたえる、国際的な大政治家としての力量を、これからますます發揮してゆくことも、疑いのないところである。

わたしが本書を執筆したのは、以上のようなことを読者のみなさんに、広くお伝えしたかったからである。華国鋒の少年時代のことなど、まだじゅうぶんにわかっていないところもあるが、正確な資料をえて、逐次こうした部分も補ってゆきたい。内容についてのご批判やご教示をいただければさいわいである。なお、華国鋒が最後にみずから責任をとって処理した、「四人組」との党内一回目の路線闘争については、『江青とその一味』と題して、青年出版社からすでに出版されているので、ぜひあわせて読んでいただきたい。資料的な裏付けがあるとともに、華国鋒の人間像を、この角度から理解していくのにも、おおいに役立つと思うからである。

最後に、この書物の出版にあたって、青年出版社の福井肇社長からいろいろお世話になった。ここに付記し、感謝しておきたい。

一九七八年四月

新井宝雄

目次

まえがき 1

第一章 華国鋒の生いたちと抗日戦争..... 13

少年期の歴史 13

迫りくる危機 17

華少年毛沢東思想とめぐりあう 19

抗日救国連合会の主任となる 21

革命とアヘン 23

てん足を解いた同志 25

児童団を組織せよ 27

軍火合作社の建設 28

民衆にとけこむ 30

重視した理論学習 30

白樺の皮に書いた「刻苦奮闘」 31

日本軍との激闘 34

闘争指導小組の組長 38

わら人形、日本の鬼を走らす 39

戦局の指導権を握る 41

戦闘の砦「大衆合作社」の創設 43

第二章 解放戦争と青春時代……………47

国内戦争をたたかう 47

二つの卵 50

激戦のなかで誕生した劇「劉胡蘭」 54

土地改革と劉少奇路線 55

心かよう「華政委」 57

少年とらばの旅 61

団結を重視する 62

工作隊を率いて南下 65

第三章 湖南の地へ……………70

花咲く広びろとした舞台 70

湘陰県の初代書記 71

土匪や地主と格闘 75

湘陰県の土地改革 79

東奔西走の明け暮れ 81

省委「華国鋒に学べ」と呼びかける 84

第四章 革命と建設

..... 118

湖南最初の互助組 85

少年伝令と華国鋒 87

蚊屋に布団に本が全財産 91

毛主席の故郷で活躍 93

「華おじさん」と三人の孤児 97

投機、単独経営との闘争 104

全国にさきがけ高級合作社を組織 106

中国共産党七期六中全会で報告 107

一九五五年の華国鋒論文 109

洞庭圍高級農業生産合作社のばあい 115

湖南省の仕事 118

大躍進を断固支持 121

彭徳懐路線とのたたかい 123

「实事求是」 126

毛主席によって省の書記に指名される 129

人間、華国鋒 130

劉少奇路線と対決 134

清聯大隊に住みつく 139

第五章 刻苦奮闘の讃歌……………148

「農業は大寨に学ぶ」運動の赤旗を 148

「貴いのは意欲を燃やすこと」 150

広東の経験を学ぶ 153

毛主席の激賞 156

長寿人民公社のダム建設 157

心血をそいだ韶山灌漑区 159

大衆路線をゆく 161

遠謀深慮の成果 166

第六章 文革の先頭にたつ華国鋒……………170

プロ文革の発動と深化 170

欧陽海水路での「左」との闘争 172

三支両軍 175

革命委員会の設立 176

次男、小平の下放 180

擁軍愛民 182

中国共産党中央委員に選出される 184

第七章

工業、科学技術、軍、教育、文芸の建設

208

全国で最初に省党委員会を再建 187

韶山での幹部学習 188

少年への手紙 189

北に安郷あり南に新田あり 191

農業発展要綱の水準をこえた湖南 197

哲学を学ぶ汨羅の農民 200

二つの歌 204

偉大な教師の故郷・韶山 205

工業の空白を埋める 208

婦人の工場 213

科学技術の振興 214

華国鋒と兵士たち 215

教育熱心な優れた父兄 223

百花斉放の文芸 226

湖南の人びとの評価 228

第八章

国政に励む華国鋒

230

中央の要務に参画 230

第九章 「四人組」打倒

党を代表して福建省へ	231
アモイの前線で	234
林彪事件の処理	237
全国の農業発展を指導	239
広東の各地へ	240
泥んこの政治局員	241
娘をすすんで農村へ	243
副総理兼公安部長	245
農民を家に招く	246
海城、營口の激震	249
餃子ものがたり	252
夜も眠らず	255
たくましい再建の歌声	257
チベットの祝賀訪問	260
重慶に一陣の春風	262
大寨をたたえる	265

「四人組」との対決	270
「園丁の歌」の攻防	271

第十章 中国の新らしい星

299

横暴な美術・工芸支配 274

大寨での激突 275

破壊されようとした科学技術 277

妨害された体育、鉄道 279

華国鋒と鄧小平 280

毛主席の提案で党第一副主席に 282

唐山地震と二つの路線 284

災害をいたむ心 290

毛主席の死、「四人組」の粉砕 292

第二の解放 295

大寨と大慶に学ぶ会議の召集 299

大慶と「四人組」 302

華国鋒と大慶 304

東北三省を視察 308

人民こそ真の英雄 313

かなめをつかんで国を治める 313

雷鋒に学ぶ運動 316

筋金入り第六中隊 318

あらたな発展期の指導者 321

華国鋒年表 327

第一章 華国鋒の生いたちと抗日戦争

少年期の歴史

華国鋒は、一九二一年に山西省の交城県で生まれた。交城県は、山西省の省都太原から西南約五〇キロのところにあり、汾河と文峪河にはさまれた静かな農村地帯であった。父母は貧しい労働人民であった。両親はすでに亡くなっているが、実兄がひとり、いま交城県に住んでいる。

華国鋒はおだやかで、ひとにたいする思いやりの深い、そして正義感の強い子どもであった。家が貧しかったのでしばしば転居したが、学問を好みよく読書をした。

ひとは、その生まれた環境や歴史的な時期によって、その一生を、大きく左右されるものであるが、華国鋒もむろ

ん、その例外ではなかった。まず、人口の一〇%しかない地主や富農が耕地の七〇%を持ち、逆に農村人口の七〇%をしめる貧農や雇農たちが、土地の一七%でいどしか所有していないという、封建的な土地所有関係の農村のなかで、華国鋒が、多くの矛盾を感じながら成長したということとは、まったく疑う余地のないところである。これが、華国鋒を、中国革命の奔流のなかに身を投じさせる基盤になったのである。いっぽう、華国鋒を理解するためには、華国鋒が生まれて青年期に達するまでのあいだに、中国の歴史が、果たして、どのように動いていったのかということも検討してみなければならない。そこには当然、華国鋒の思想的な発展をおしはかる、重要なかぎが潜んでいると考えられるからである。

華国鋒が生まれた一九二一年は、くしくも中国共産党が

創設された年であった。一九一七年のロシア革命の影響をうけ、反帝・反封建ののろしをあげた、歴史的な一九一九年の五・四運動をへて、この年の七月一日に、上海で中国共産党の第一回全国代表大会が開かれた。一全大会といっても、黨員は五七人で代表は一二二人であった。この大会には、湖南代表として毛沢東も出席していた。毛沢東は当時、二十八歳であった。長くて暗い中国の歴史のなかに、その行手を照らす中国共産党という灯が、ひとつはつきりともりはじめたその年に、華国鋒という毛沢東の後継者が、産声をあげたというのは、歴史のめぐりあわせとはいえ、まことに興味深い。

それからの中国は、解放と人民の勝利をめざして、激動と苦難の歳月を重ねてゆくのであるが、それは華国鋒の生いたちのなかに、生なましい刻印をおしつづけていった。

華国鋒が満一歳の誕生日を迎えた一九二二年には、孫文が二月に桂林で第一次の北伐を宣言し、北洋軍閥にたいするたたかいの火ぶたをきっておとしている。またこの年には、有名な香港の海員ストと安源炭鉱のストライキが敢行され、五月には張作霖が東三省の独立を宣言するなどのことがあり、国内の情勢はまったく混とんとしていた。この年、中国共産党は上海で二全大会を開き、党の綱領とコミンテルンへの加入を決定している。黨員は一二三人で、代

表は一二人であった。

華国鋒が満二歳になった一九二三年には、一月に上海で孫文とヨッフュが会見して共同宣言をだし、中国革命にたいするソ連の支持が表明された。こうした影響もあって、反帝・反封建のたたかいはいっそう高揚し、二月には京漢線のストライキが、弾圧をけておこなわれている。この年の六月、中国共産党は三全大会を広州で開き、孫文の国民党との合作を決定した。黨員は四三二人で代表は二十七人であった。

翌年の一九二四年には、国民党の一全大会が広州で開かれ、連ソ、容共、労農援助の歴史的な三大政策が決定された。九月に孫文が第二次の北伐宣言を発表した情勢をうけて、中国共産党は上海で四全大会を開き、北伐をまえにして組織的な準備をおこなった。黨員は九五〇人で代表は二〇人であった。華国鋒が満四歳になったこの年、五・三〇事件や香港の大ストライキがあいついでおきている。

有名な北伐が敢行されたのは、華国鋒が満五歳になったときのことであった。北方に巣くう封建的な軍閥たちをうちたいらげるため、広東を出発した北伐軍は、怒濤のような勢いで北上し、ひじょうな速さで長江の周辺にまで進出した。その間、中国共産党は、大衆と緊密に提携するたたかいをおしすすめる、その勢力をおおいにのぼした。が、こ